

特256
945

建設院建築局

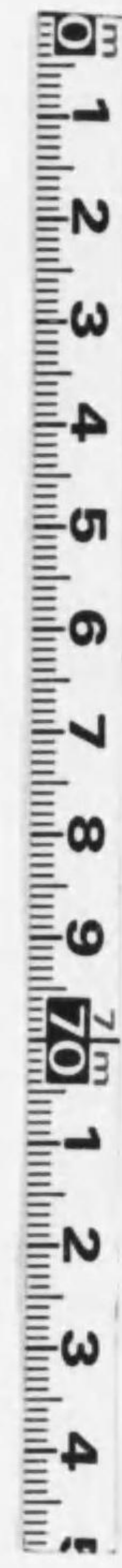


昭和二十二年
度住宅基準の解説

建設院總裁官房弘報課編



發行所寄贈本



始



昭和二十一年度の住宅基準

建設院 建築局

はしがき

最近議會等で住宅問題がすいぶん論議されているが、その中に基準を作つて大量生産をしたらというような意見がある。私共も昭和二十一年の末頃からさういつたものを計畫して、さきにその結果として昭和二十二年住宅基準を發表したが、本稿は住宅基準の考え方と、この基準から出てきた具体的な設計範例を示したものである。

今回の基準は、戦災復興院の中に、「昭和二十二年住宅基準調査委員会」というのが設けられ、その委員の答申に基づいて決定されたものであるが、委員会のメンバーは左の通りである。

- | | |
|------------|-------|
| 住宅管理理事 | 井上 新一 |
| 同本部建設課長 | 桑田貞一郎 |
| 同 東京支部長 | 黒崎 幹男 |
| 同 東京建設局住宅課 | 井上 正明 |
| 同 建築課長 | 石井 桂 |
| 厚生省公衆衛生院 | 佐藤 鑑 |

- | | |
|----------------|-------|
| 同 建築課長 | 伊藤 滋 |
| 同 第二工學部助教授 | 横山 不學 |
| 同 第三工學部助教授 | 平山 崇 |
| 同 第二工學部助教授 | 小野 薫 |
| 同 第二工學部助教授 | 高山 英華 |
| 同 日本女子大學 | 柴谷 邦 |
| 同 東大第一工學部講師 | 堀口 捨己 |
| 同 住宅文化協會々長 | 島田 藤 |
| 同 三機工業企業課長 | 齋藤 祐義 |
| 同 實業製作所技師長 | 池田 榮一 |
| 同 戦災復興院技術研究所 | 谷 重雄 |
| 同 東大第一工學部教授 | 武藤 清 |
| 同 東京工大助教授 | 後藤 一雄 |
| 同 日本復興建材工業研究所長 | 佐々木京一 |
| 同 戦災復興院建築局管轄課長 | 武 武 |

住宅問題の急激化した昭和十六年頃から今日に至るまで、幾多の基準決定のために努力がなされた。官廳や諸團體によつて制定された基準は次の通りである。

- 1 住宅と敷地設計基準 昭一六・三 厚生省
- 2 庶民住宅の技術的研究 昭一六・一一 建築學會
- 3 住宅設計基準 同年 住宅營團
- 4 臨時日本標準規格 昭一八・四 内 閣

これらの基準の設定に關しては、幾多優秀な技術者が参加し、その効果に對しては基準に基く強力且つ具體的な實施が期待されたのであるが、實際の建設事業は基準の通りには行われず、基準は單に啓蒙的な役割を果したに過ぎない。これは基準の決定が民主的になされなかつたこと（在來の日本の行政としては何とも止むを得ぬことであつたが、その目的が住宅水準の維持にあるのか、用材規格の決定にあるのか、はつきりしなかつたこと等のためである）である。

戦時中全國の住宅建設を一貫的に擔當して來た住宅營團も今年はじめ解散され、住宅建設の主體は各地の公共團體に任せられることになつたので、技術的な統一は更に望みがたなくなり、むしろかゝる弱い技術行政力を以てても實施を期待し得るような基準を作ることが考えられねばならぬ問題となつたと云ひ得るのである。一面、現場に居る技術者の技術力の活用こそ期待されなければならぬのであり、その自らのアイデアと創意工夫を實施するといふ場合の技術家らしい感激こそが、今後の住宅建設における幾多の改善を齎すと期待されるのであつて、従つて今日の基準の作製に當つては住宅建設の前提條件を如何に決定するかという

ところに重點がおかれた。

しかし、今年の場合には特に庶民住宅に關する限り或る意味で戦時中よりも更に烈しい窮乏のうちにあるのであり、例えば六坪二合五勺の越冬簡易住宅程度の最少住宅の建設すら、不満足にしか行われなかつたというやうな戦後の現實を見つめる時、基準といふことも更にシヴィヤリに考えなければならぬと感ずるのである。

私共としては少くとも住む上での最低の線を劃し、量的にも質的にもこの線を守り、この苦しい時代を越えて將來のよりよき時代に向いたいと考へるのである。衣食住のうち食糧は少くとも合理的な基礎の上に立つて二合八勺の配給とか、三合の配給とかが確保されるやうな努力がなされていく。事住に關しては、國民全體に一人當り何坪かの基準面積を確保しようといふ努力は未だ行われていないのであるが、新らしく建つものに對してすら最高を限る規定は存在しても最低を限る規定は存在しない。

また、食糧の配給は、その調理法は問題でなく、その量のみが問題なのであるが、住宅に關してはその質即ち建て方が問題なのであり、即ち同じ資材の量を與えられても、これを有効に使うか、粗放に使うかによつて効果は甚

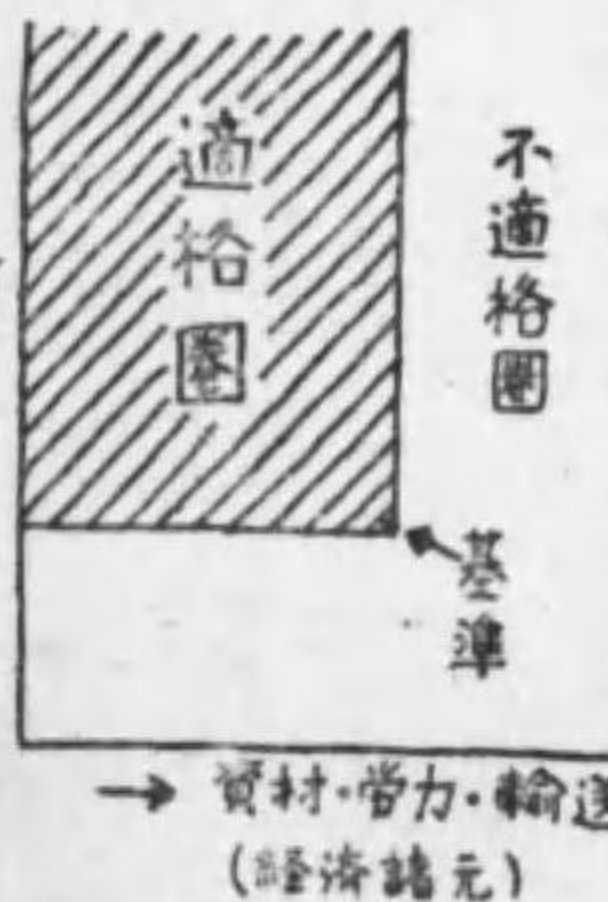
だ異つて來るのである。

三

問題はこの質の指標を如何にして決定するかという点である。今まではこの指標が面積であると極めて平易に考へられて來た。しかしそれはむしろ量的な指標であり、質的にはもつと他の指標が考へられねばならない。この基準ではその指標は住生活の諸元に求められる。諸元とは

- (a) 生活諸元（室の廣さ・給水・熱源・入浴施設・照明など）
- (b) 環境諸元（保温・風通・防風など）
- (c) 安全諸元（耐荷・耐風・耐震など）
- (d) 管理諸元（修繕費・耐用年限など）

の如き住生活の基本的要素である。



(住宅諸元) 住居基準は住宅の性能を諸元で数字的に表すことが第一である。従來の住宅基準は住宅の質を表わすのに諸元を取

上げずに、いきなり仕様とか平面計畫を定めたとくに缺陷があつた。

更にこの裏付けとして、住宅を造るに要する経済的な諸元が必要である。この決定は甚だ困難であるが、資材、労力の所要量、輸送量の指標を定めた方が、實際的であらう。

私達は、これ等の指標を組み合せて住宅の質をはかるモノサシを作りたいと考へた。即ち、この基準に適合する住宅とは第一圖のように、資材、労力、輸送量等はこの基準以下であり、住宅の質についてはこの基準以上のものである。このようなモノサシに適合するものであれば、よりよいものも、もつと創造されるであらうし、またそのやうなもの出現を促すことこそが本基準の役割であると考えるのである。現在の建築生産の非合理的な性格も、こうした科學的な解明によつてこそ段々と合理性の明るみへ出て來るであらう。

こうしたやうな考えから、委員會に於て種々の討議がなされ、大體昭和二十一年度に住宅營團が實施した案に沿つて且つ建築制限令による一戸當り四〇平方米（七人家族のとき五〇平方米）という線を考慮しつゝ今回の基準は決定された。

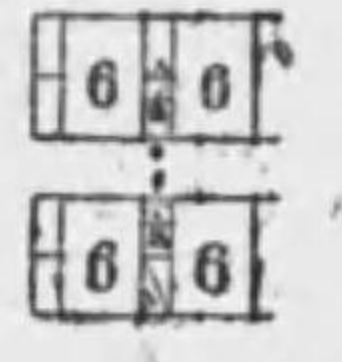

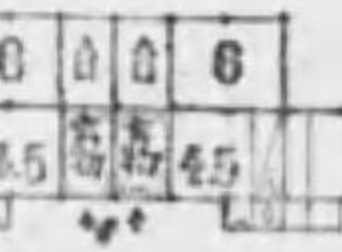
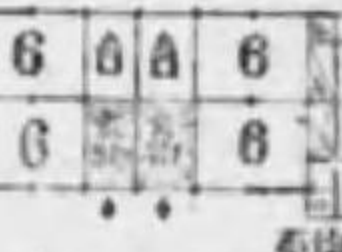
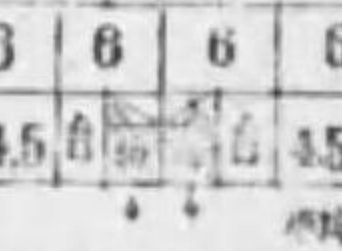
この基準は總則（住居基準）、木造住宅規程、コンクリートブロック住宅規程

鐵筋コンクリート住宅基準から成つて居り、その前二者を今回御紹介する譯であるが、總則では前記の住居諸元の問題即ち質的な表示の問題が取扱われ、住生活の本質的な諸要素を明示している。この場合、今までの基準の原則の一つであつた食食分離の問題が本年度に於ては一應お預けになつていくといふ事は私達としても諸賢の御諒解を求めなければならぬ。これは現存する最少住宅の住み方を調査しなければならぬ問題でもあるが、少くとも現在の悲痛な住宅事情にあつては軽微な部屋には全面的に就寝が行われるであらうといふ私共の考え方なのである。

又日本家庭の構造の質の一つの指標として保湿度という問題を取上げてみた。實際の結果は現在建つやうな家が悉ろしく粗放であり、指標をとり難いといふ結論に達したのであるが、住宅の質をこうした分り易い明らかな指標によつて定めてゆく爲に今後共この問題は究明してゆきたいと考へている。

四

木造住宅基準は、住宅の種類、平面計畫の考へ方、構造、設備の問題、敷地の問題、資材労力の指標などを取扱つて居る。メートル法敷地制と間尺制の問題は依然として關切れぬまゝ、種類

K1ma		空地間メートル整數制	平均 25 ^{m²}
K2ma			平均 31.06 ^{m²}
K3mb K3mc			平均 38 ^{m²}
K4mb K4mc			平均 43 ^{m²}
K5mb K5md			平均 54 ^{m²}

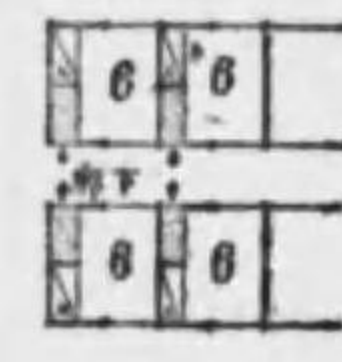
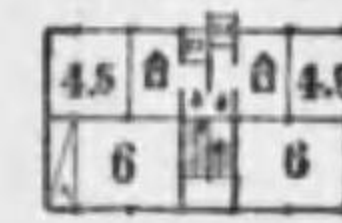

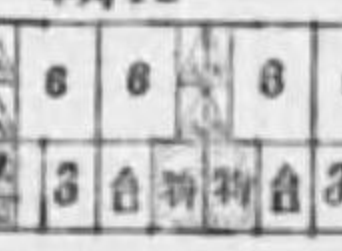
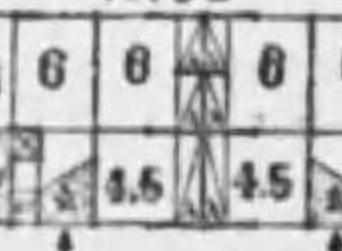
當つて細い點では修正すべき點があつたが、大體において成績よく、今後の住宅の大量生産という問題に當つて、このような考え方が基本的になるべきであるという考えから採り入れることにした。3mbの場合など、通り庭の巾が廣過ぎるようにも考えられ、平面として完全なものとは言ひ切れぬが、少くともこのような骨組の標準化とい

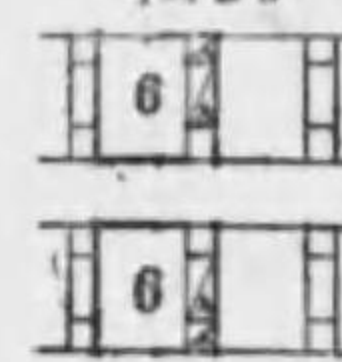
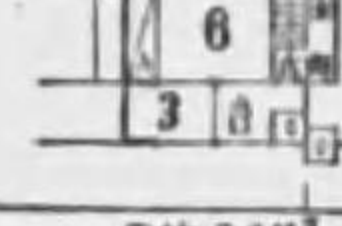
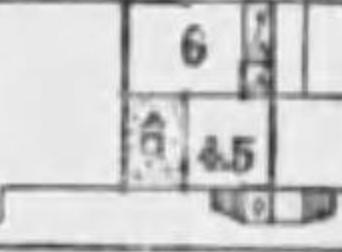
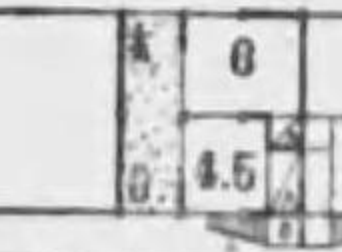
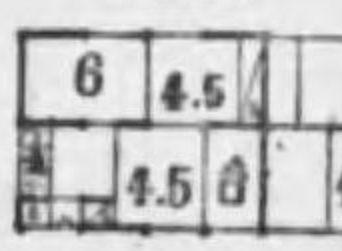
う方向が、現在の大工技術を對象とした工法の大量生産化への道を示していると考えられる。仕上らういても、箇例に記するに止めた所以は、現在認むような材料で建築出来るに限らないからである。

五 さて、箇例の一つについて資材、勞力、輸送量等の正確な算定を行つて、

建築の原價の構成を究明したいと云えた。(表参照)この積算を通じて私共の感じたところは、木材が意外に少しかゝらないといふことである。柱を三寸角にするか、三・五寸角にするかといふことで木材の使用量は甚だ變つて来る。このような點をも少し究明し、合理的な用材規格と建築規格を結合することによつて建築生産の合理化は更に

進めうると考えられる。以上、極めて粗雑な説明をしたのであるが、今年度の基準はこのように考へられているので、私共はこの基準が住宅生活の科學化と建築生産の合理化のためにそのように使用されることを希求していること、今後ともそのためあらゆる修正を加えてゆきたいと考へているといふことを結びの語とする。

K1sa		空地間尺制	平均 20.0 ^{m²}
K2sa			平均 24.4 ^{m²}
K3sb K3sc			平均 36 ^{m²}
K4sc K4sd			平均 42 ^{m²}
K5sc K5sd			平均 52 ^{m²}




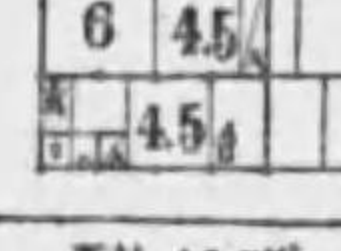
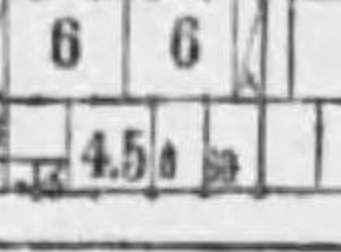
1ma		メートル整數制	平均 25 ^{m²}
2ma			平均 31.06 ^{m²}
3mb 3mc			平均 31 ^{m²}
4mb 4md			平均 37.35 ^{m²}
5mc 5md			平均 48 ^{m²}

も併用でゆくといふ不徹底さを今年も亦繰返しているのは何とも残念なことであるが、現実にメートル整數制が行われていないし、またこれによるに限られた面積の中では間尺制に比べて、どうしても密敷が一つ減つてしまふことは避けられない問題であらう。

で五平方メートルづゝを増すこととした。種類及び階数は前基準に倣つていけるが、今回はこれにサフィックスをつけて整理に便ならしめた。敷地は、戦災復興院の土地局で定められた區劃整理設計基準によつていける。資材勞務に關しては、箇例の積算の結果を参照し、今年度の資材事情と

にらみ合わせて決定した。設計箇例は、上述のような條件によつて設計すればこうなるという一つの例を示している。アパートの場合は特別の特色はないが、三〇—五〇平方メートル程度の住宅は、すべて柱間を二メートル、梁間を三メートルとして

柱と梁を規則正しく組立て、その中に住宅をわり込むという風な考え方で設計したから、間取りから柱配置を決定してゆく従来の普通の考え方とは、サカダチしているとも、言えるであらう。この方法は、住宅管轄の大量建設に當つて用いられた方法であり、現場に

1sa		間尺制	平均 20.6 ^{m²}
2sa			平均 29.4 ^{m²}
3sb 3sc			平均 30.8 ^{m²}
4sc 4sd			平均 39.6 ^{m²}
5sc 5sd			平均 49.5 ^{m²}

事	名	材	工	人	坪	坪	坪	備
3. 屋根工	セメント瓦	下地共	工元	人	4.00	2.00	0.154	一人=7.0坪(棟共) 一人=9.5坪
				瓦手	8.00	4.00	0.368	
				屋根工	3.00	1.50	0.135	
4. 筋野底	平	事	工	人	5.00	2.50	0.230	
				筋	0.50	0.25	0.023	
				工	6.00	3.00	0.276	
5. 左木	官	事	工	木脚工	4.50	2.25	0.21	一人=10坪 一人=坪1坪
				官元	22.00	11.00	1.00	
				左手	11.00	5.50	0.50	
				左官	0.25	0.125	0.01	
				手元	0.25	0.125	0.01	
6. 建入窓換前建	具口	事	工	建具工	32.00	16.00	1.47	一本=付2人 " 1.5 " " 2 "
				工	24.00	12.00	1.10	
				細工	18.00	18.00	1.65	
				硝子工	1.00	1.00	0.092	
				建具工	3.00	1.50	0.138	
7. 兼便	及所	事	工	工	97.00	48.50	4.450	0.23
				工	0.70	0.35	0.032	
				工	0.50	0.25	0.023	
				工	1.00	0.50	0.046	
				工	2.20	1.10	0.101	

4 mc 住宅 運搬 (建物)

番	名	材	工	人	坪	坪	坪	備			
1.	基	礎	工	事	石	0.7 × 1,000 = 700 kg					
						砂	0.5 × 3,000 = 1,500 "				
						砂	0.25 × 1,800 = 450 "				
						石	51 × 18 = 918 "				
						ト	106.04 "				
2.	木	木	材	主體 35石4703 附帶 1.1633	臺	1.60	0.80	0.073			
3.	屋	根	工	事	瓦	36石6336	臺	2.50	1.25	0.115	1臺=付15石
						セ	5.8,410 瓦	臺	3.00	1.50	0.137
4.	筋	野	底	事	工	1210 "					
						筋	38,812 瓦				
						工	9,018				
5.	左	官	工	事	材	0.07					
						28.80					
						0.264					
						76.964	臺	0.38	0.018	6.0017	
6.	建	具	工	事	具	7848.0 瓦	臺	4.00	2.00	0.182	
						瓦	225.0				
						金	4.5				
7.	兼	便	工	事	工	1201.0					
						349.50	臺	0.182	0.091	0.0084	
						285.0					
					土	100.0					
合					臺	11.670	5.835	0.0092			

昭和22年度計畫住宅

4 mc 住宅主要資材 (建物) (一棟 72平方メートル)

名	材	品	目	寸	法	單位	一棟當り	一戸當り	坪當	備
木	材	(主建)	木工	事	用	石	35,470.3	17,735.2	1,628.6	
						石	1,163.3	0,581.7	0,053.4	
						石	2,214.2	1,107.1	0,101.7	
						石	38,847.8	19,424.4	1,783.7	
						瓦	35,066	17,533	1,610	
						瓦	1,111	0,556	0,051	
						瓦	1,306.8	0,653.4	0,060	
						瓦	0,523	0,261	0,024	
						瓦	38,006.8	19,003.4	1,745	
						瓦	2,178	1,089	0,100	
						瓦	3,672	1,836	0,169	
						瓦	3,168	1,584	0,144	
						瓦	0,070	0,035	0,0032	
						瓦	28,800	14,400	1,320	
						瓦	0,264	0,132	0,012	
丸	釘	建	物	用	用	鋼	101,640	50,820	4,607	
						鋼	4,400	2,200	0,202	
						鋼	1908,360	954,180	87,465	
						鋼	2014,400	1007,200	92,334	
						鋼	144,000	72,000	6,620	
						鋼	504,000	252,000	23,100	
						鋼	504,000	252,000	23,100	
						鋼	12,000	27,000	2,480	
						鋼	9,000	6,000	0,560	
						鋼	3,268	4,500	0,413	
						鋼	31,800	1,634	0,150	
						鋼	31,800	15,900	1,460	
						鋼	43,600	15,900	1,460	
						鋼	16,000	21,800	2,000	
						丸	釘	建	物	用
長6尺	8,000	16,000	1,47							
長6尺	12,000	4,000	0,368							
長6尺	0,70	6,000	0,550							
長6尺	0,500	0,350	0,023							
長6尺	0,250	0,250	0,0230							
長6尺	51,000	0,250	0,0115							
長6尺	15,000	25,000	2,350							
長6尺	4,000	7,500	0,690							
長6尺	23,500	2,000	0,184							
長6尺	35,000	11,750	1,080							
長6尺		17,500	1,610							
長6尺										
長6尺										
長6尺										

4 mc 住宅 勞務 (建物)

名	材	品	目	寸	法	單位	一棟當り	一戸當り	坪當	備	
1.	基	礎	工	事	工	殘工處分共	土	1.20	0.60	0.055	
						土	0.80	0.40	0.037		
						土	1.00	0.50	0.046		
						土	0.80	0.40	0.037		
						土	0.50	0.25	0.023		
						土	1.00	0.50	0.046		
						土	0.20	0.10	0.0092		
						土	5.50	2.750	0.2532		
						土	76.00	38.00	0.50		
						土	10.00	5.00	0.41		
2.	木	主	體	工	事	大	8.00	4.00	0.370		
						大	1.00	0.50	0.046		
						大	5.00	2.50	0.230		
						大	1.00	0.50	0.046		
						大	5.00	2.50	0.230		
計					100,000	50,000	4,606				

終

昭和二十三年四月十五日印刷
昭和二十三年四月二十日發行

【非賣品】

編輯兼
發行人 藤原節夫

印刷人 伊藤鐵壽

印刷所 三洋工業株式會社

東京都品川區南品川一ノ二一

發行所 建設院總裁官房弘報課

東京都千代田區千代田一ノ五